

《小学生の部》  
佳作（警察庁交通局長賞）

愛媛県松山市立宮前小学校  
6年 藤渕 悠玄

命を守る心配性

弟がまだ三歳くらいの頃、危うく事故で命を落とすところでした。父が玄関から出かけるのを見て、弟が勝手について行ったのです。玄関のかぎを開けて、門は閉まってなくて、父を追いかけて門から道路に飛び出した瞬間、車がきて急ブレーキをかけました。ものすごい音と共に、運転手さんは降りてきて、大声で怒鳴ったそうです。

「俺を犯罪者にする気か！ 気をつけろ！」

弟はキヨトンとして、父はひたすら謝ったそうです。あの時の事を話す時、普段は何があっても動じない父がこう言いました。

「一生のトラウマになっている。生きていて本当に良かった。門を閉めなかったパパが悪い。後ろも確認すべきだった。」

子供はそれまでしなかったことを急にすることになると聞きます。僕はこのことをうっすら覚えていて、父も母もこの日以来「するかもしれない」意識を持ち、色々僕たちに注意するようになりました。だから僕も、強く心に残っています。弟が生きているから、こうやって話せるけど、「もし…」と考えるだけで僕の心臓はドクドクして、息苦しくなります。

母は以前、信号待ち停車中に、斜め後ろから勢いよく追突され、むち打ちになり、通院と痛みで不便そうでした。首の痛み、頭痛などで、湿布を貼るのが僕と弟の役目になりました。洗濯物を干すのや、洗い物も、首を動かさなくていいように僕たちも協力。安全運転で信号待ちしていても、ある日突然事故にあうのです。違反していないくとも、事故に巻き込まれる恐れがあります。そう考えると、道路に出るということは、歩きでも、車でも、幸せな日常が、一瞬にしてうばわれることもあるのだと怖くなります。普段の生活では、何事も気にし過ぎない方が良いと思います。だけど、道路にいる時は、心配性な方が良く、「車が突っ込んでくるかも」「青だけど止まってくれないかも」「僕に気づいていないかも」挙げればたくさんの「かも」があって、慎重に行動したいです。心配性になって「青になつてもすぐに渡らず左右を見よう」「僕を見つけてもらえるよう、渡る時は手を高く上げよう」「通り過ぎるまで広い場所で待とう」そうやって、たくさん不安を、一つ一つクリアし、一つだけの命を守りたいと考えています。

車もバイクも、歩く人も、自転車も、みんながお互いに気をつけて、何より自分の命は自分で守る、その気持ちを強く持つことで無理をしなくなり、安全への第一歩になると僕は思います。命を他人任せにせず、後悔のないように、後悔させないように、僕は自分を守りたいです。そして、周りの人も守れるように、安全意識を持った大人になりたいと思います。